

イタリアにおけるドニゼッティの研究と活動  
および日本の現状

# 日本ロッシーニ協会例会

タイトル

## ＜本日のプログラム 前半＞

### 1. 生地ベルガモでのドニゼッティの研究・普及・復興活動

#### ドニゼッティ財団

- 歴史と活動
- ドニゼッティの生家
- ドニゼッティ劇場
- クリティカル版および自筆譜の復元・校訂の進捗状況
- ベルガモ音楽フェスティバル

### 2. その他のドニゼッティ関連機関

- ドニゼッティ博物館
- アンジェロ・マイ ドニゼッティ資料館
- MIA 慈善協会ミゼリコルディア・マッジョーレ

講演のプログラム＜前半＞

## 生地ベルガモでのドニゼッティの 研究・普及・復興活動

### Fondazione Donizetti ドニゼッティ財団



イタリアにおけるドニゼッティの研究と活動は、ドニゼッティの生地である北イタリア・ベルガモの研究機関が中心となって行われており、その中でも一番大きな団体は、ベルガモ市の文化評議会と県をあげて支えている、非営利団体『ドニゼッティ財団 [Fondazione Donizetti](#)』です。

ドニゼッティ財団は、主にガエターノ・ドニゼッティ Gaetano DONIZETTI (1797 年—1848 年) と、ドニゼッティの師であり、ベルガモの街にたくさんの貢献をした、ジョヴァンニ・シモーネ・マイル Giovanni Simone Mayr (1763 年—1845 年) の、二人の作曲家の生涯と音楽の研究、およびその復興を目的としています。とりわけ今年 2013 年は、マイルの生誕 250 年の記念の年にあたるため、彼の作品の公演や文献書の出版などの準備をしています。

事務所は、ドニゼッティ劇場の中にあり、主な活動内容は以下のとおりです。

- 1) 研究会・講演会・討論会の開催、出版活動、資料館の充実および資料の貸し出し
- 2) ドニゼッティ劇場と提携した、毎年9月からのシーズンに開かれる『ベルガモ音楽フェスティバル Bergamo Musica Festival』
- 3) ドニゼッティの生家の改修、および施設での普及活動
- 4) 自筆譜を復元、再校訂した作品の公演、およびクリティカル版の出版



**Gianandrea Gavazzeni**

ドニゼッティ復興の歴史は、没後 100 年の 1948 年から始まった、ベルガモ出身の指揮者ジャンドレーア・ガヴァッツェーニ氏を中心とした『ドニゼッティ・ルネッサンス』において、まずはオペラ『ベトリー Betly』・『ポリウート Poliuto』・『呼び鈴 Il Campanello』が上演されたことに遡ります。同じ年に、音楽学者であり弁護士であったドニゼッティ研究家のグリエルモ・バルブランによる、『ロマン派時代におけるドニゼッティの作品 L' Opera di Donizetti nell' Età Romantica』、および音楽学者グイド・ザヴァディーニ Guido Zavadini 氏によるドニゼッティの書簡集が出版され、ドニゼッティ研究および作品の復興・再演が、およそ 40 年もの間続けられました。そして 1983 年には、『ロマン派時代におけるドニゼッティの作品』をさらに充実させた、『ガエターノ・ドニゼッティ～ロマン派音楽家の生涯と作品 Gaetano Donizetti : Vita e Opere di un Musicista Romantico』が出版されました。この本は、バルブラン氏と、彼の死後第 4 章以降は、弟子のブルーノ・ザノリーニ Bruno Zanolini 氏によって完成された著書です。1998 年の没後 150 年には、高橋和恵による日本語翻訳版が、昭和音楽大学から出版されました。

ドニゼッティ財団は、1990 年に入って、ガヴァッツェーニ氏によって創案され、生誕 200 年の 1997 年に創設されました。残念ながらガヴァッツェーニ氏は、財団の創設を待たずに、1996 年に亡くなられ、そしてその後、ドニゼッティの筆跡が解明出来たドニゼッティ劇場の音楽監督ジャン＝ルイージ・チェレーア GianLuigi Cerea 氏も亡くなり、しばらくはルネッサンスの勢いが停滞していた時期もありました。しかし最近になって再び、ベルガモの街のシンボルとして、ドニゼッティの復興と普及が、市と財団を挙げて急速に加速してきました。その一つが、2006 年から始まったベルガモ音楽フェスティヴァルで、もう一つがドニゼッティの生家の改修と利用、そしてソチャーレ劇場の改修です。

## Città Alta



ベルガモの街は、高台にある旧市街（チッタ・アルタ）と、その裾野に広がるチッタ・バッサの二つに分かれています。ベルガモの語源はベルゲム（山の家）というケルト語から来ていると言われています。歴史はとても古く、紀元前 1200 年にも遡ります。ローマ帝国領時代を経て、1428 年にはヴェネツィア共和国のコッレーオーニ傭兵隊長が進出し、ヴェネツィアの支配下に置かれ、今でもチッタ・アルタの要塞の門には、ヴェネツィアのシンボルのライオンの像の彫刻が残っています。

ドニゼッティの生まれた 1797 年は、ちょうどフランス軍のイタリア進出によって、ヴェネツィア共和国が崩壊した年でもあります。ナポレオンの率いるフランス軍とともに戦ったベルガモ市民も、勝利と自由を得た活気に満ち溢れていました。その後、フランス軍が 1814 年に追われてから 1859 年のイタリア統一までの 45 年間は、オーストリアの支配下に置かれます。



## ガエターノ・ドニゼッティの生家

ガエターノ・ドニゼッティの生家は、チッタ・アルタの要塞の外側にある、ボルゴ・カナーレ地区の現在のボルゴ・カナーレ通り 14 番地にあります。当時は、織物職人などが住む、ひじょうに貧しい地区でした。ドニゼッティの家はさらに貧しく、アパートの貯蔵庫などのある地下にありました。



ドニゼッティの生家は、1929年1月に国の文化財に指定されて、市が管理をしていましたが、地下の生家の部分だけが訪れた者に公開されていただけで、まだ1階から上の部分には人が住んでいる状態でした。2009年に銀行の出資を得て、上の階も買い取られ、全面的に改装し、ドニゼッティのメモリアル施設として、新しい観光スポットの一つになっています。



入口を入ると受付があります。今は土・日・祭日のみ公開されていて、平日は予約を取ると入館出来ます。





地下の階段を下りると、右手には貯蔵庫として使われていたスペースが二つ並んでおり、生家は左手側にあります。手前の貯蔵庫の天井には、外から雪を落とし込むための穴があり、雪を利用して食糧などを貯蔵していました。奥側の貯蔵庫には井戸があり、地下はかなりの湿気があったことと思います。

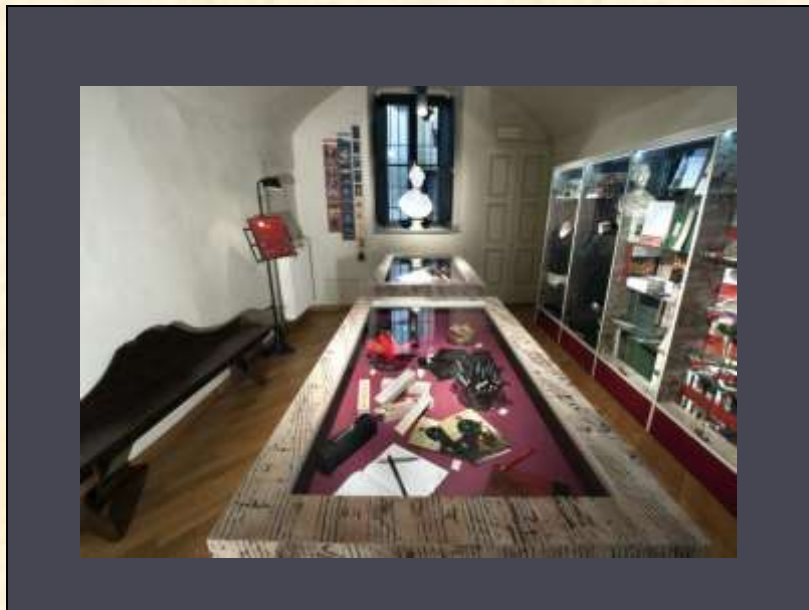


建物は傾斜地に建てられているため、生家側には外につながる扉があります。家は狭く貧しいのですが、そこからのロンバルディア平原を望む景色は美しいものでした。二間だけの本当に小さなスペースのこの家に、ドニゼッティは両親と兄弟と7人で暮らしていました。



暗い穴倉のような貧しい家のことを、ドニゼッティは後になって、師マイルに手紙に書いています。その有名な手紙の一文が生家の床に刻まれています。

《私はボルゴ・カナーレの地下で生まれました。光の影が全く入り込まない、地下の階段を下りて行くのです。そしてわたしは、ある時は悲しい、ある時は幸福な予感を抱えながら、まるでフクロウのようにそこを飛び立ったのです》

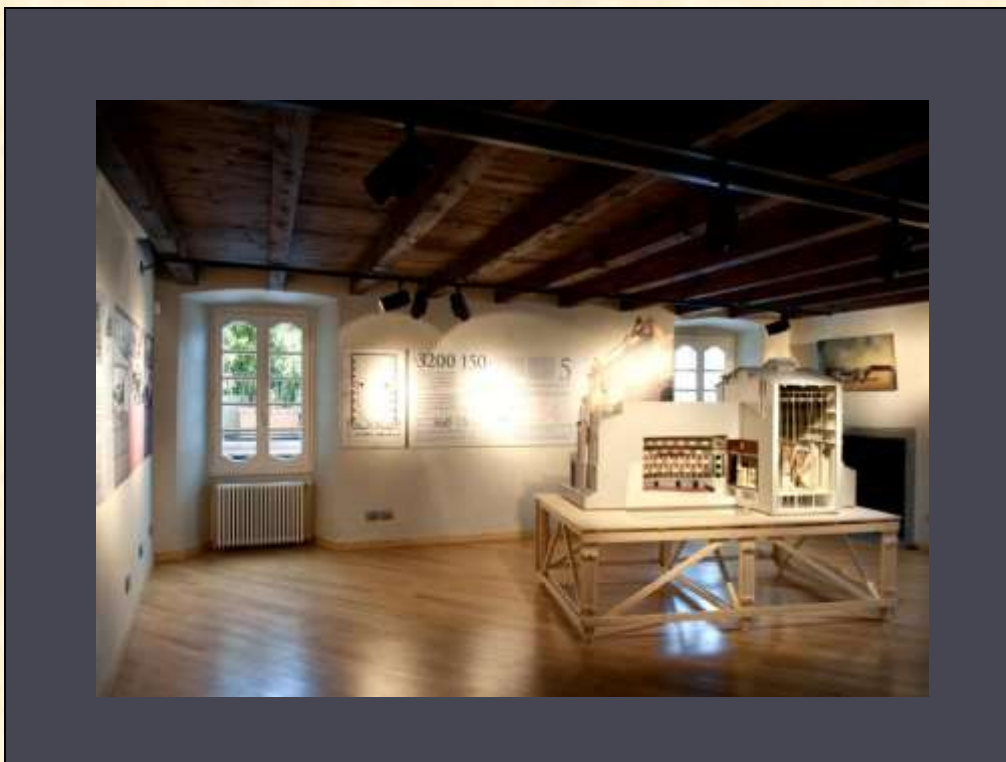


受付のある 1 階には、ドニゼッティの生涯を写真といっしょで紹介するサロンがあります。その向かいには、ドニゼッティ劇場で上演されたドニゼッティ作品のCDやDVD、クリティカル版のスコア、ドニゼッティ・グッズなどが販売されているギャラリーがあります。

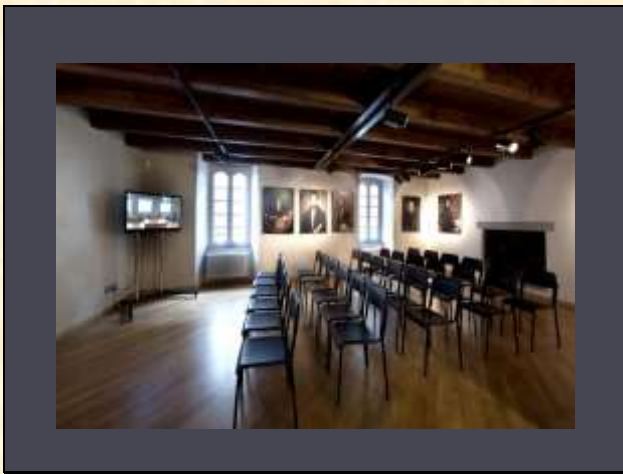
## Quaderni della Fondazione Donizetti



ベルガモ音楽フェスティヴァルでは、オペラの公演ごとに、リブレットや資料をまとめた『ドニゼッティ財団帳（ノート） Quaderni della Fondazione Donizetti』を出版しており、ドニゼッティ作品によるQFも、ギャラリーに展示されています。



上の階には、《ドニゼッティの劇場 Teatro di DONIZETTI》という間があり、公演で使用された衣装や、『愛の妙薬』初演時の、舞台装置のからくりを再現した模型など、劇場関係のものが展示されています。一つの壁には一面に、各舞台用語が書きこまれた大きな舞台写真が貼られており、一般の方々へのオペラの普及も目指しています。



最上階は、ドニゼッティ研究者だったアッシュブルックの名前をとった《アッシュブルックの間 Sala ASHBROOK》があります。二間に分かれており、一つはコンサートや講演会などに使用される 40 席のサロン、もう一つは、ドニゼッティ劇場で上演された公演記録を観覧できる、オーディオ・サロンとなっています。

コンサート・サロンでは、土・日を中心に演奏会が行われ、聴衆がサロンに入り切れない時は、隣のオーディオ・サロンから映像を通して演奏を聴くこともできます。



ドニゼッティ財団のもう一つの活動は、ドニゼッティ劇場と提携して催される『ベルガモ・音楽フェスティバル』です。ドニゼッティ財団の事務所は、チッタ・バッサ（下の街）にあるドニゼッティ劇場の正面から左手に回った最上階にあります。





リッカルディ劇場 Teatro Riccardi

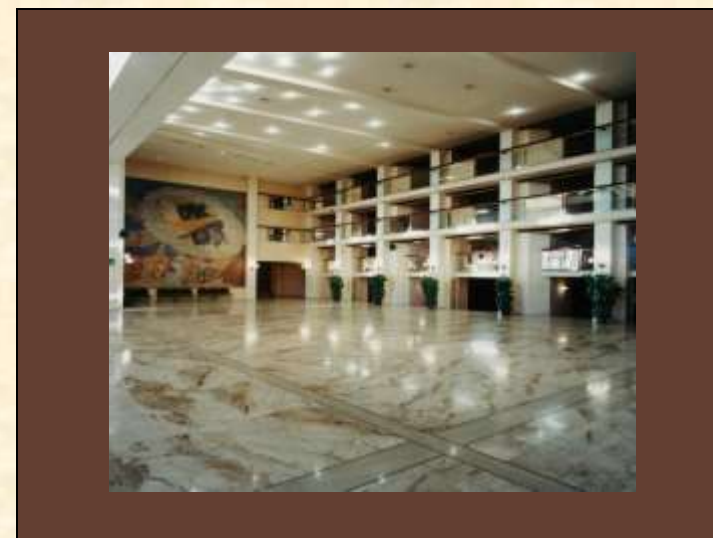
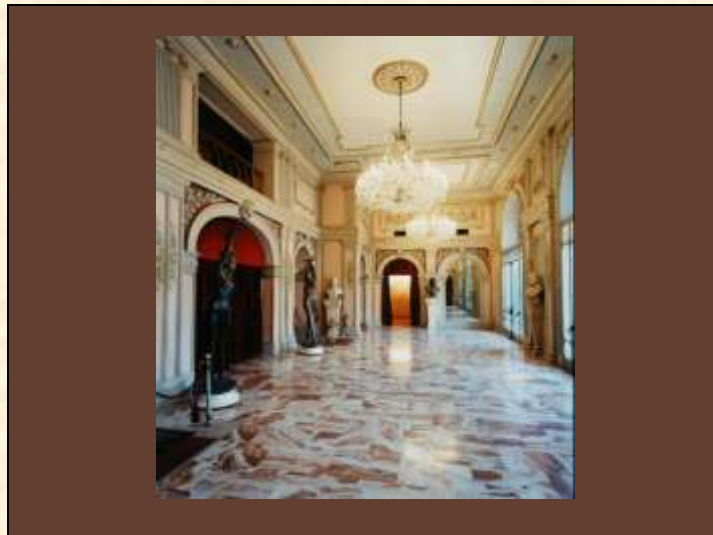
チッタ・アルタの裾野に広がるチッタ・バッサ（下の街）は、新市街と言うには古い歴史のある街です。チッタ・バッサには、かつて羊毛や絹、家畜の売買などの市場（メルカート）があったことでも知られています。1700年当時、市場には常設の建物を建ててはいけなかったのですが、絹を扱っていた裕福な商人ボルトロ・リッカルディ Bortolo Riccardi が、大きな小屋のような石造りの土台の劇場を建設しました。市場周辺には臨時の芝居小屋のようなものはいくつかあり、人々が芝居やオペラを楽しんでいたのですが、この石とレンガで出来たがっしりとした新しい劇場は、大変な反感を買いました。1784年にジュゼッペ・サルティ Giuseppe Sarti のオペラ『エピロの王メドンテ Medonte Re di Epiro』が上演されましたが、その時のポスターには、「市場の平地の中の新しい石の劇場 Nuovo Teatro di Pietra Nel Prato della Fiera」という言い方で劇場の名前が書かれています。石のイメージをなくすために、出来るだけ布が施されて使用されましたが、ドニゼッティ劇場の前身の、「リッカルディ劇場」という正式な名前で本格的にオープンするのは、1791年8月24日のオペラ『見捨てられたディドネ Didone abbandonata』の初演の時でした。このオペラは、ピエートロ・メタスターズィオのリブレットによるもので、ベルトーニ Bertoni、ランピーニ Rampini、ナウマン Naumann、ガッツァニーガ Gazzaniga、パイズィエッロ Paisiello らによって書かれたパステイッチョ（寄せ集めた作品のこと）のような作品でした。



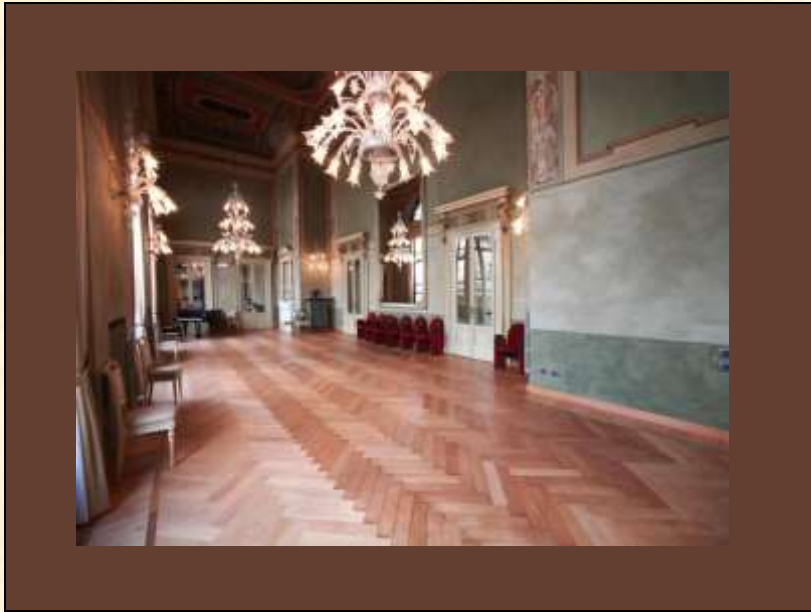
### Teatro Gaetano Donizetti (1897年)



1797年1月11日から12日の夜にかけて、劇場が原因不明の火事で焼けてしまい、新たに建築家ジョヴァンニ・フランチェスコ・ルッキーニの設計で再建されます。1800年6月30日のオープニングに上演されたのはお芝居でしたが、マイルの作品など、オペラ作品もたくさん上演されました。1830年にはドニゼッティと同級生だったバルトロメオ・メレッリ Bartolomeo Merelli が劇場の支配人となります。1897年、ドニゼッティの生誕100年の年に大改修が行われて、現在に近い正面玄関と、今でも残されているフランチェスコ・ドメネギーニ Francesco Domeneghini による天井画が施されます。1938年にはベルガモ市のものとなり、個人の劇場が公共の文化施設へと変わっていきます。そして、支配人のビンド・ミッシローリ氏と指揮者のガヴァッツエーニ氏が協力して、ドニゼッティ・ルネッサンスへとつながります。



1992年から再び改装をして、劇場正面とホワイエの改修、そして新たな空間として、ホワイエの奥に大きな広間が増築されました。ここでは、サロン・コンサートや講演会、オペラの稽古なども行われます。



二階（イタリアの一階）に上がると、100人収容出来る講演会用の広間や、合唱やバレエなどの稽古をする間や、公演に関する資料が収められている資料館があります。



98 個のシャンデリアで飾られた劇場内部には、532 の平土間席と 102 のパルコ席があり、収容人数は 1154 人という、ロンバルディア州の劇場の中では、スカラ座の次に大きな劇場です。



Don Pasquale (2010年)



Lucrezia Borgia (2010年)



Gemma di Vergy (2011年)



Maria Stuarda (2012年)

### Caffè del Teatro



ベルガモ音楽フェスティバルでは、ドニゼッティの作品を含む数本のオペラとバレエ作品が、毎年9月から11月の間に公演されます。復元版やクリティカル版の初演も、毎年積極的に行われており、各公演の前には『カフェ・デル・テアトロ』が開かれて、演出家・指揮者・芸術監督による作品解説や演出意図などの講演があります。

## Teatro Sociale



ドニゼッティ財団のもう一つの取り組みとして、チッタ・アルタにあるソチャーレ劇場の再興があります。ソチャーレ劇場は1809年に建てられて、当時はたくさんのオペラ作品が上演されていましたが、80年近く荒廃した状態で放置されていました。2009年に銀行の出資を得て、急ピッチで改装が行われ、クリティカル版の『シャムニーのリンダ』が上演されました。

現在ドニゼッティ財団には、ドニゼッティの筆跡を解明して、オリジナルの手書きの楽譜を復元・校訂出来る、マリーア・キアーラ・ベルティエーリ Maria Chiara Bertieri 女史 (No.6『ピエートロ大帝』・No.14『ドン・グレゴリーオ』・No.43『パリズィーナ』No.49『マリーノ・ファリエーロ』・ほか)、リーヴィオ・アラゴーニャ Livio Aragogna 氏 (No.48『ヴェルジ家ジェンマ』) ほか、数名の校訂者がいます。ドニゼッティのオペラが、初演後に別の劇場で再演された時に、その土地や配役に合わせて、ドニゼッティ自身が修正・改作を施した作品なども、復元・校訂されてベルガモ音楽フェスティヴァルで上演されました。

復元版のあるオペラ作品、およびリコルディ社と提携して出版されたクリティカル版などの、新しいエディションに関する情報は、「オペラ作品カタログ」といっしょに解説しました。

**\*校訂版の楽譜、およびクリティカル版の楽譜の詳細な情報は、文献欄別枠でも取り上げます。**

**ご参照ください。**

**「オペラ作品カタログ」**

## ドニゼッティの関連機関



## ドニゼッティ博物館 Museo Donizettiano

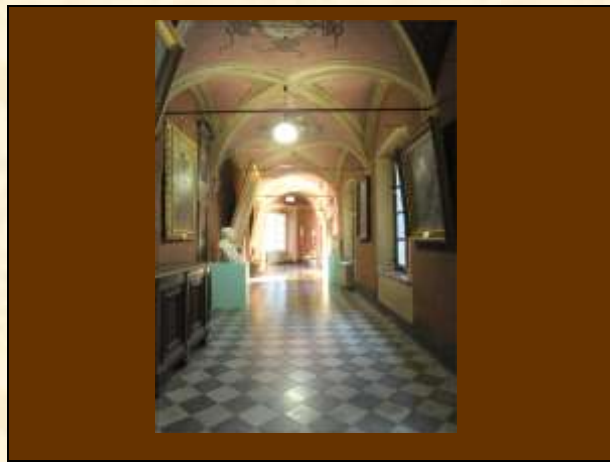


その他のドニゼッティの関連機関としては、チッタ・アルタにある『ドニゼッティ博物館』と『アンジェロ・マイ ドニゼッティ資料館』、『MIA（慈善協会ミゼリコルディア・マッジョーレ）』が挙げられます。

『ドニゼッティ博物館』は、ドニゼッティと師マイルのお墓がある、サンタ・マリーア・マッジョーレ教会のちょうど裏側にあたる、アレーナ通りの9番地にあります。

1897年、ドニゼッティの生誕100年の時に、イタリアやフランス、オーストリアから、可能な限りのドニゼッティの遺品や手紙、本、自筆譜、肖像画、写真などを集めて、大きな展示会を催しました。展示会の後、それらのものは一旦持ち主に返されたのですが、その時に博物館創設の計画が生まれました。





1902年12月17日、慈善協会コングレガツィオーネ・ディ・カリタがドニゼッティ博物館の創設を決定して、1906年9月15日に公開されました。博物館の開設にあたって、ジョヴァンナ・ジネーヴラ・ロータ＝バソーニ・スコッティ Giovanna Ginevra Rota-Basoni Scotti 男爵夫人より莫大なドニゼッティの遺品が寄贈され、同時に音楽学校 Istituto Musicale も、同じ建物内に併設されました。

1868年にパルマで生まれ、オーボエとイングリッシュ・ホルンの奏者だったグイード・ザヴァディーニ Guido Zavadini 氏が、音楽学校の事務局長のポストの選考に合格し、すぐにドニゼッティ博物館の管理責任者にも指名されました。

ザヴァディーニ氏は約50年の歳月をかけて、熱心にドニゼッティの自筆譜やあらゆる遺品を収集して、1936年に博物館の最初のカタログを作成し、そして彼が80歳の時、膨大な書簡集、『ドニゼッティ 生涯＝作品＝書簡 Donizetti Vita-Musiche-Epistolario』を出版します。

2002年に、ドニゼッティ博物館はベルガモ歴史財団の管轄となり、現在の運営となっています。



現在はバゾーニ=スコッティ男爵夫人のひ孫さんに当たる方が、ドニゼッティが最期を迎えた部屋などをそのまま保管していますが、時折テレビの取材や、映画のロケーションなどに協力をしている程度で、公開はされていません。

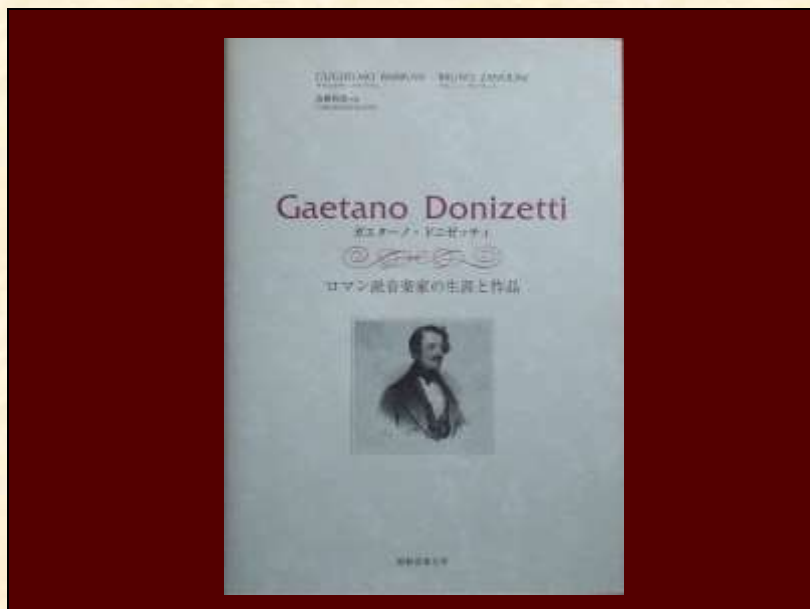
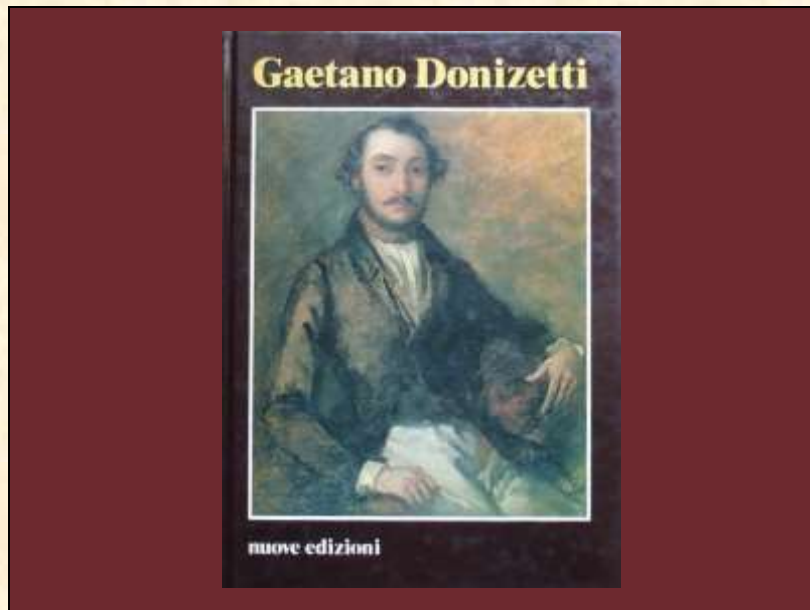
博物館のフロアーには、ドニゼッティの使っていた楽器や、ベッド、肖像画などが展示され、中央の展示棚には、出生証明書やオペラのリブレット、自筆譜などが、年代順に展示されています。

Piazza Vecchia



Civica Biblioteca Angelo Mai

チッタ・アルタの中心にあたる広場が、ヴェッキア広場 Piazza Vecchia です。その広場を挟むように、ちょうど向かい合わせにサンタ・マリーア・マッジョーレ教会と、アンジェロ・マイ資料館があります。その中には、ベルガモの歴史公文書をはじめとして、ベルガモの街に生涯をかけて貢献した、ジョヴァンニ・マイルの膨大な自筆譜や、男爵夫人から寄贈されたドニゼッティの大部分の遺品が保管されています。



出版されているドニゼッティの重要な資料としては、先ほどのグイード・ザヴァディーニ氏による膨大な書簡集のほかに、2002年に出版された『ガエターノ・ドニゼッティ Gaetano Donizetti』が挙げられます。その中には、オリジナルの自筆譜から、コピーされた手書きの楽譜、出版されたものまでのあらゆる保管先などの情報がまとめられており、実に膨大なりストです。また、ドニゼッティ研究者だったアッシュブルック氏による、作品と生涯をまとめた本も勧められます。冒頭で紹介した、バルブランとザノリーニによる『ガエターノ・ドニゼッティ ロマン派音楽家の生涯と作品』の日本語翻訳版は、1,000部の限定販売で出版され、最初は音楽之友社が発売元でしたが、その後ショパン社に移り、現在は絶版となっておりますが、時折インターネットなどで発売されています。

## ＜本日のプログラム 後半＞

### 3・DVD鑑賞 資料映像

オペラ『ドン・グレゴリーオ』

オペラ『ルクレツィア・ボルジア』

### 4・日本におけるドニゼッティ研究の現状

ドニゼッティ研究所 Studio DONIZETTI  
[www.studio-donizetti.jp](http://www.studio-donizetti.jp)

- 設立のきっかけ 目的 今後の課題
- 内容

講演のプログラム＜後半＞

## 『ドン・グレゴリオ Don Gregorio』

メロドラマ・ジョコーゾ 2幕

台本：ヤコポ・フェッレッティ Jacopo Ferretti

アンドレーア・トットラ Andrea Tottola

初演：1824年2月4日、ヴァッレ劇場（ローマ）

自筆譜の復元および校訂：Maria Chiara Bertieri

### <配役>

ドン・ジュリオ・アンティクワータ Don Giulio Antiquati 侯爵：	Giorgio Valerio
エンリーコ Enrico (侯爵の息子)：	Giorgio Trucco
ジルダ・タッレマンニ Gilda Tallemanni (エンリーコの妻)：	Elisaveta Martirosyan
ピッペット Pippetto (侯爵の息子・エンリーコの弟)：	Livio Scarpellini
グレゴリオ・コルデボノ Gregorio Cordebono (家庭教師)：	Paolo Bordogna
レオナルダ Leonarda (家政婦)：	Alessandra Fratelli
シモーネ Simone (使用人)：	Luca Iudovici

指揮：ステファノ・モンタナーリ Stefano Montanari

演出：ロベルト・レッキア Roberto Recchia

オーケストラ・合唱：ベルガモ音楽フェスティヴァル“ガエターノ・ドニゼッティ”  
Bergamo Musica Festival “Gaetano Donizetti”

視聴用に選んだ DVD は、ベルガモ音楽フェスティヴァルで上演された作品で、ドニゼッティ研究の進捗状況や、現在のドニゼッティ劇場の内部関係者なども合わせて解説出来る二作を選びました。

オペラ『ドン・グレゴリオ Don Gregorio』は、1824年にローマのヴァッレ劇場で『当惑した家庭教師 L' Ajo nell'imbarazzo』というタイトルで初演されたオペラで、その後、1826年の夏にナポリのヌオーヴォ劇場で再演された際に、ナポリ語によるブッフオをプラス・アルファして、ドニゼッティ自身が追加・変更・修正をした作品です。そのナポリ版の手書きの楽譜が、ドニゼッティ財団の校訂者によって復元され、2006年のベルガモ音楽フェスティヴァルで上演されました。

1824年の初演の際は、ヤコポ・フェッレッティによる台本でしたが、ナポリ版の変更・追加はすでに別な作曲家の『ドン・グレゴリオ』を手がけていた、ナポリの台本作家のアンドレーア・トットラ Andrea Tottola が担当しました。レチタティーヴォをセリフによる芝居の形に、そして家庭教師のドン・グレゴリオを伝統的なナポリ語の方言に変更しています。

内容は、貴族の息子と大佐の娘が親に内緒で秘密に結婚をして、しかも子供まで一人設けてしまっているという設定です。ドニゼッティ特有のロマン派的なノルタルジックなメロディーではあるものの、音楽の形式はまるでロッシェニを聞くかのほど、そのスタイルで書かれています。いわゆるロッシェニ二期と呼ばれる時代の作品です。

指揮者のステファノ・モンタナーリ氏は、もともとはラヴェンナの劇場のオーケストラで、ヴァイオリンのコンサート・マスターを務めていた方で、古典（バロック）のディプロマも取得しており、昨年度のベルガモ音楽フェスティヴァルの『コジ・ファン・トゥッテ』では、自らチェンバロを弾きながら、指揮をしていました。ひじょうに有望視されている若手の指揮者で、ドニゼッティ劇場の重要な役員にもなっています。

## 『ルクレツィア・ボルジア Lucrezia Borgia』

メロドラマ プロローグと2幕  
台本: フェリーチェ・ロマーニ Felice Romani  
初演: 1833年12月26日、スカラ座(ミラノ)

### <配役>

ルクレツィア・ボルジア Lucrezia Borgia(公爵の妻):	Dimitra Theodossiou
ジェンナーロ Gennaro(ヴェネツィア共和国の傭兵隊長):	Roberto De Biasio
ドン・アルフォンソ Don Alfonso(フェッラーラ公爵):	Enrico Giuseppe Iori
マッフィオ・オルスィーニ Maffio Orsini:	Nidia Palacios
ルスティゲッロ Rustighello:	Luigi
	Albani
ゲベッタ Gubetta:	Giuseppe Di Paola
アストルフォ Astolfo:	Mauro Corna
イエッポ・リヴェロット Jeppo Liverotto:	Livio
	Scarpellini
オロフェルノ・ヴィテッロツォ Oloferno Vitellozzo:	Giovanni
	Manfrin
アポストロ・ガゼッラ Apostolo Gazella:	Luca
	Dall'amico
アスカーニオ・ペトゥルッチ Ascanio Petrucci:	Dario Giorgelè

指揮: ティツィアーノ・セヴェリーニ Tiziano Severini  
演出: フランチェスコ・ベッロット Francesco Bellotto

視聴したもう一本のDVDは、ドニゼッティのロマン派音楽の基盤が確立した叙情悲劇『ルクレツィア・ボルジア』です。

ロッシー二期からドニゼッティ特有の叙情悲劇のスタイルへと移るのは、1830年に作曲したオペラ『アンア・ボレーナ』です。ロマン派の特徴は、リズム的・音響的なフレームに縛られない、感動から湧き出す自由な心理の掘り下げによる表現で、そこには息つく間もなく続く苦しみや、心の浄化へと向かう死による罪の贖い、最後には慈悲の心でヒロインを包み込む、独特の世界があります。

「気をつけなさい、4番目の夫よ」と脅す、あの伝説的な脅威のボルジア家のルクレツィアも、自分の息子の前では母となり、その心理に迫っています。自分自身の手で毒殺してしまった息子の最期を見とる心的状況を表す時、ドニゼッティの人間的な慈悲が向けられ、ロマン派独特の純粋な柔らかい旋律で、カタルシスの世界へと導いていきます。

当時の習慣として、オペラの最後はプリマ・ドンナの大ロンドで締めくくるのを、ドニゼッティは新しいフィナーレを書いて、息子の死で劇的な頂点で終わるといふ、新しいスタイルを確立しました。従来のロンドで、プリマ・ドンナが超絶技巧を聴かせることで、ドラマ性が犠牲になってしまうからなのですが、しかしそれでもまだ、当時は再演される度に、プリマ・ドンナによって、お定まりのロンドで終わることが多く、1844年にヴェルディが、オペラ『エルナーニ Ernani』でロンドをなくしたことで、ベル・カントの習慣が幕を下ろすこととなります。

今回の講演会で視聴したDVDも、最後はロンドで終わるバージョンで、その矛盾を聴いていただきました。

演出家のフランチェスコ・ベッロット氏は、ドニゼッティ財団の芸術監督でもあり、ドニゼッティ劇場のキャスティング・オーディションの責任者でもあります。またヴェネツィアの国立音楽院のアルテ・シェニカ(舞台上の表現技術)の講師でもあり、ベッロット氏の演出する舞台では、動きの美しさが定評です。公演においては、現代演出の公演が多い中、出来る限りトラディショナルな舞台をとという指針を示しています。



最後に、日本におけるドニゼッティ研究の現状および、『ドニゼッティ研究所』を創設した経緯と目的、サイトの内容などを解説しました。

ドニゼッティの生まれた年と亡くなった年が連続するお蔭で、1997年に生誕200年が、1998年に没後150年が訪れ、その時ようやくドニゼッティの作品が見直され、珍しいオペラ作品も国内で何作か取り上げられました。(公財)日本オペラ振興会ではオペラ『ラ・ファヴォリータ』が上演され、音楽之友社では、知られざる歌曲とオペラ・アリアを特集した4回に亘るシリーズの公演と、展示会も開催されました。同時に日本語による翻訳書も出版され、個人的にドニゼッティを研究する人も出てきました。しかし日本におけるドニゼッティの研究は、15年近く経った今もまだ、ひじょうに遅れており、日本語による新しい本も出版されず、資料がとてども少ないのが現状です。そこで、ベルガモのドニゼッティ関連の機関と提携して、少しでも日本語による資料を紹介できる機関をと考えました。昨年、ベルガモ市やドニゼッティ財団をはじめ、各関連機関とコンタクトを取り、全面的な協力を得られることとなり、これを機にドニゼッティ研究所の創設に踏み切りました。最初、ある大学の一角にドニゼッティの情報コーナーを設けて、「研究室」という案があったのですが、震災後、計画が裁切れ状態となり、まずはサイトにて立ち上げることにしました。少しでも日本においてドニゼッティの研究が発展し、作品の再評価・普及につながることを目的としており、イタリア語によるドニゼッティの多くの情報を日本語に訳し紹介することで、音楽を学んでいる方々、著述や演奏などに貢献できればと思っております。ロッシーニからヴェルディの架け橋的な存在であるドニゼッティの、ロマン派



音楽の価値が見直され、日本により広まることを願っております。

サイトは、①生涯と作品、②ドニゼッティの生地ベルガモ、③文献と資料、④情報というように、大きく4つの項目に分けています。現在は、ドニゼッティの生涯と作品カタログ、ベルガモ関連施設の紹介のほか、『ドニゼッティ博物館ガイド』（日本語訳）および博物館展示物の画像を掲載途中です。しばらくは資料の充実に力を入れますが、日本ロッシェニ協会など、ほかの研究団体の協力を仰ぎながら、さまざまな論考なども載せられるように拡大していきたいと思っております。

最後に、聴講された方々からの質問を受け、2時間45分ほどの講演会を終了しました。